
始まりは異世界

ゆなかりか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

始まりは異世界

【Nコード】

N3617P

【作者名】

ゆながりか

【あらすじ】

気づけば、そこは異世界でした。異世界に飛ばされてしまった少女、果歩。ところが、果歩は、魂だけが異世界のお姫様と入れ替わってしまっていた…！？

—Are you ready ?

「……つまり、ここ、異世界なのね？」
「はい」

櫻井果歩さくらい かほの質問に答えたのは、白い髪に金色の目を持つ少年、p
astだ。

past——つまり、パストは、無表情で果歩を見つめている。

……この白い髪って……全部白髪なのかな。
関係ないことを考えつつも、パストの話をきちんと聞く“フリ”
をする果歩。

白髪だったら、相当なお爺ちゃん？

あ、でも、コッチの世界だと、この髪の方が当たり前、とか？

「カホ様にとっては異世界でも、私達にとっては、ここが真の世界
であります。カホ様の住んでいた世界の方が、異世界だと考える者
も少なくはないでしょうね」

私もその一人ですが、と付け加えるパスト。
なあーんか、無表情のくせにズカズカ人に嫌味を言ってくる奴だ

なあ。

「それで、パスト……さん。あたし……どうして、こんな格好なの！？」

果歩がもと居た世界——つまりは、リアル・ワールド現実世界では、普通の格好をしていた。

詳しく言うならば、学校指定の制服にマフラー、手袋と言ったような格好だ。

ところが、この世界——パラレル・ワールド異世界に来てからは、服が違う。ドレスのような服を着させられ、しかも……

「この顔、あたしじゃないんだけど？」

「はい。存じております」

存ジテオリマス、じゃないわよ！

この顔誰！？

もとのあたしは何処！？

「はっきり申しましょう。本来ならば、貴方の体ごとこの世界に召喚するつもりが、手違いが起こり、魂だけがこの世界に来てしまったのです。そして、召喚に立ち会った、姫様と魂が入れ替わってしまいました」

……絶望だ。

一瞬で、泥沼に落ちるような感覚を覚える。

目の前が、闇で覆われた。

正直、果歩は、異世界とりっぷというものに憧れていた。
小さい頃からの、夢でもあった。

でも、それは、肉体ごと移動する、という前提があってこそ。
魂だけ移動して、勝手にどこぞの姫様と入れ替わった、だなんて。
最悪だわ。

「帰る！あんたが言う、姫様とやらも、困っているんでしょう！？
だったら、早くもとに戻して！」

駄々をこねれば、パストからすごい目で睨まれた。
その表情は、無表情ではなく、殺意に満ちている。
な……何よお。

「お前みたいな下品な奴と、姫様が入れ替わったなんて、信じられないな」

げ、げひん……ッ！？

パストに鼻で笑われた果歩は、ぶちギレそうになったが、何とか怒りを抑える。

それほどまでに、パストの目は、怖かった。

「お前がこの世界に来なければ……俺と姫様は、婚約を結べたのに……！！」

こん、やく？？？

それって、つまり、結婚……？

パストの一人称が、「私」から「俺」に変わっていた。
顔が、般若のようになっていた。

「俺と姫様は、将来を誓い合った。親達の反乱にも負けずに、ここ

まで来た。来週には……正式に、婚約をしようと思っていたところなのにつ!!」

突然、この世界に、悪魔が現れた。

そして、人々を殺し始めたのだ。

対策を考えた王宮の偉い人達は、リアル・ワールド現実世界から勇者を呼び込もうという話になった。

その勇者というのが、何故か果歩であった。

理由は、ただ単純に、顔が怖そうだったから、である。

勇者を召喚する職務についたパスト。

そのパストの様子を見るために、姫様は実験室に来たそうだ。

姫様とパストがイチャつく間に、事件は起こった。

何故か、勝手に召喚されてしまったのだ。

眩い光に、パストが目を瞑った。

そして、その間に、姫様は果歩と入れ替わっていたのだ。

「——だから。だから、お前が来なければ……俺と姫様は……!!」

「どーでもいいけどさあ。この格好じゃ動きにくいから、ズボンない?」

パストの怒りが頂点に達したところで、果歩のいい加減な声が入る。

突然の果歩の邪魔に、たじろぐパスト。

その焦りを果歩は見逃さずに、ズバリと言葉を放った。

「だいたい、あたしを召喚したのは、アンタでしょーが。姫様とイチャついてて、目を離れたアンタが悪いんじゃないの? 馬ッ鹿じゃ

ない。あたしに罪を擦り付けるとか」

さっき鼻で笑われた分のお返しなんだからね。

次に、鼻で笑ったら……覚悟しなさいよ、パスト。

果歩は、自分で気づいていない。

今、悪魔のような笑みを浮かべていることに。

「し……召喚する人種を、間違えた……」

そんなパストの独り言も、今の果歩には聞こえない。

今は、どうやってパストを懲らしめるかという妄想に浸っているからだ。

「とにかく、ズボン出してよ」

「あ、ありませんよ。だいたい、姫様にズボンなど……」

気づけば敬語に戻っているパスト。

どうやら、果歩の言葉で、熱も冷めたようだ。

さっすがあたし！

「あたし、姫様じゃないから。今のこの体は、アンタが思っているような、健気な姫様じゃなくて、男勝りの強い女の子なのよ」

鏡に映った顔が、自分のものじゃないことに驚き、そしてまた、見とれてしまう。

なんて……なんて、美しいんだろうか、この子は。パストが惚れてしまうのも無理はない。

黄金で、ツヤツヤの長い髪。

女らしく、華奢な体系。

パッチリとした二重に、青い瞳、高い鼻、桃色の頬。

現実世界の果歩とは……大違いだ。

果歩は知っている。

自分の顔が、どれだけ醜いか、ということ。

黒くて短く、ボサボサでバサバサした髪。
男らしく、ガツシリとした体系。

細い一重に、黒い瞳、低い鼻、薄黒い肌。

その果歩が……今は、こんな美人に。

それが嬉しくもあり、空しくもあるのだ。

「……姫様を、悪魔と戦わせるなど、この私が許しません」

パストの低い声。

もちろん、言葉の意味は、「果歩のため」ではなく、「姫様の肉
体のため」である。

この言葉に騙されるほど、果歩も馬鹿ではなかった。

「あ、そう。でも、何言われても、私は戦うからね？」

言い捨ててから、ここ——実験室の扉を開けた。

果歩が一步踏み出したとき、何かに抱きしめられた。

……パスト……？

どうして、抱きしめるの？

離してよ。

あたしは……本物の、姫様じゃないんだから。

「ごめんなさい。貴方が、カホ様だということは分かっています。ですが、その顔を見ると……どうしても、姫様だと思ってしまいうのです」

愛する人が、偽者になってしまった悲しみ。

その辛さは、果歩には分からない。

でも、どれだけ辛いのか、想像することはできる。

「……離して、よ」

だけど、どれだけ辛いのかを想像しても、果歩は姫様の身代わりにはなれなかった。

だって、果歩は、果歩だから。

「――申し訳、ありません」

数秒抱きついてから、すばやく離れるパスト。

その顔は、既に無表情だ。

「カホ様。ズボンを姫さ……いえ、カホ様に履かせるのはできませんが、動きやすい格好ならばありますので。明日には出発できるように。ああそうだ、食料の準備もしなければ……」

さっきとは打って変わって、テキパキと動き出すパスト。

白い髪が揺れ、金色の目が光る。

「ちよっ……。パストってば、あたしを止めるんじゃないの？」

つつい聞いてしまった。

あまりにも、変わりすぎたパストに。

「止めようと努力したつもりです。ですが、カホ様は言う事を聞かないようなので。無駄な労力は使いたくありませんしね」

うわっ、デキル男だ！

微妙に感激してから、果歩はパストをまじまじと見つめた。
見れば見るほどいい男、である。

「ですが、姫様の肉体を傷つけるわけにはいきません。いくら、心は男らしくても、体がか弱い女性なのですから」

「男らしい、って……。あたし、一応女なんですけど」

「体が姫様ならばなおさらです。姫様は人一倍健気なのです」

果歩の言葉を無視し、言葉を続けるパスト。
無視するなよ！

「私が、お守りしなければなりませんね」

「――へ??」

妙にサラっと言われて、一瞬返事が遅れた。

何、それ。

それって、つまり……

「旅にお供します。よろしいですね、カホ様」

これが、最初の旅の仲間ができた瞬間だった。
そして、旅の始まりでもあったのだ。

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
/
/
/

（後書き）

いかがでしょうか？

短編は、時間を気にしなくていいので好きです。

というわけで、気が向いたら、次回の話を更新します。

もちろん、次回も短編ですよ。

一回一回

パストと果歩の二人旅は、最初の国、『レインツェルド国』へとやってきた。

そこで出会ったのは、浅黒い頬に鋭い目、ズンドウの体つきの少女だった。

……って、これ、現実世界リアル・ワールドのあたしい！？
レインツェルド国の少女の正体とは！？

それでは。

（慣れない三人称の一人称という書き方なので、おかしな点があったらスイマセン）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3617p/>

始まりは異世界

2010年12月8日01時54分発行